

収録 2. 今月の神戸新聞コラム「正平調」より

気になった今月のニュースメモの記録 ぶつぶつのつぶやきも

◎ 2023.11.27. 神戸新聞正平調

「ミスターラグビー」と呼ばれた平尾誠二さんは試合前のジャンケンがグーしか出さない。

それを知っている相手はどうでるか それを知っている相手はどう出るか…

これで相手の作戦を読み解いたという。そしてまた、今の政治はどうなんだろうか……と

ジャンケンに負けた平尾氏は「目の前の十円」を拾うようでは試合には勝てんぞ」と

相手選手に行ったと正平調氏は言う。

思わず引き込まれて、最後まで読んで、正平調氏のなぞ解きに「ふむふむふむ」と。

正平調

試合前のジャンケンはグーしか出さない。「ミスターラグビー」と呼ばれた平尾誠二さんの伝説を、スポーツイタターの玉木正之さんが書いていた。で、それを知っている相手はどう出るか。そこから敵の作戦を読み解いたとき敵将もグーしか出さず、あいこが続いた。さすがに審判が怒り、たまらずパーに転じた相手に平尾さんは言ったという。「目の前の十円を拾うようでは試合には勝てんぞ」(「彼らの奇蹟」新潮文庫) ◆目の前の十円：ならぬ人気取りに走るようでは信頼を得られんぞーとどこからかそんな皮肉が聞こえてきそう。岸田政権の打ち出した減税政策の評判がよろしくない。内閣支持率に反転の兆しはなく低迷が続く◆多くの人は目先の減税に飛びつき拍手をしてくれるはずだ、との期待がもし首相にあつたなら、読みは完全に外れた。後に増税が待っていること、バラマキのツケがいずれ回ってくることを国民は見抜いている◆目の前の「いいね」がほしい。それほどに気を取られて次々と手を繰り出すうち、もともと自分が何をしたかったのか分からなくなる。デジタル社会で陥りがちなワナだが、まさか首相もそうなのであるか◆見たいのは腰の据わった政治。ジャンケンでいえば、愚直のグー。 2023.11.27

ラグビーシーズンが始まり、先のワールドカップで活躍した外国選手たちが、こぞって日本のチームに入って、今年はずいぶん戦いに。楽しいラグビーシーズンの幕開けです。

◎ 2023.11.28. 神戸新聞正平調

かつて 単身赴任していた山口の話神戸新聞正平調氏が取り上げた。

それも 山口の詩人 中原中也のつぶやき「思えば遠く来たもんだ」の詩の一行から、

さらに先日訃報が報じられた小説家 伊集院静さんの小説も取り上げられていた。

伊集院静さんも山口の出身と。山口県の風土について綴られていて懐かしい。

もう山口を離れ、20数年でも懐かしい。「思えば遠く……」

今回 久しぶりに故郷の懐かしい工場街を歩きました。 故郷のことは何年たっても懐かしい。

正平調

「思えば遠く来たもんだ」。中原中也がつぶやくように詩をつづる。十二歳の冬の出来事に思いをはせると、これまでの日々がよぎり、ほろりと恋しさが募る◆港に響く汽笛の音と白く空に上っていく湯気、雲の間に浮かぶ月。それらがふつとあの頃へと引き戻す。十二歳の冬に何があったのかは分からないが、誰にもそういう瞬間があるだろう。ちよつとセンチメンタルになるときが◆同じようにこの人の小説を読むと、しばしば遠い記憶が呼び戻され、甘酸っぱい感情に包まれることがある。それを味わいたくて本を手取る。そんな作家、伊集院静さんの訃報が届いた◆エッセーの書きぶりや独自の美学、私生活から「最後の無頼派」「ダンディズム」などの代名詞で語られることが多い。その中で書評家の北上次郎さんの言葉に一粟を投じたい。それは「少年小説の名手」◆「受け月」「機関車先生」、自伝的な「海峡」3部作。いずれも初期の作品だが少年期の出会いと別れ、特に人々の生き死にが哀切さとともに描かれる。中也と同じ山口出身。その風土が影響しているのだろうか◆生前接した人たちが「律義」「誠実」とコメントしている。男女を問わず、よくもてたそう。かなわないなど思いつつ、また本棚に手が伸びる。 2023.11.28